

生涯の友との出会い

M⑱ 藤井 保男

1. まえがき

19回生は1971年卒業、団塊の世代である。1947年、1948年、1949年の3年間の出生数は800万人、中学校では、一学年に60人のクラスが14もあった。この溢れるばかりの人のなかで、神戸大学工学部機械工学科で4人の生涯の友を得た。この生涯の友がどの様に構築されたのか、50年前の消えつつある記憶を掘り起こして思い出してみる。

2. 学生時代

生涯の友との出会いは、1967年4月の神戸大学の入学式である。入学式の後、工学部の看板の前で撮った記念写真をみると、新入生は46人であった。この5月に座談会で大学に行ったが、現在の看板はこの時の看板と同じように思えた。全員が学生服で、坊主頭の人が多いのに驚き、大阪では中学生が丸坊主であるが兵庫県では高校生が丸坊主であることを、入学してはじめて知った。

生涯の友の初期形成は若狭湾キャンプである。4月に入学し5月にキャンプに行った。10人位で行ったと思うが、この時の私を含め7人が生涯の友となる。

(注：現在と人数が異なるのは次章で述べる。)

7人とも大阪、西宮からの通学で帰りは一緒になることが多く、自然に交友関係が深くなった。教養部では代返をしたり、休講の時は一緒に六甲山を越え有馬温泉まで歩いたこともあり、楽しい教養部生活であった。



工学部玄関前での入学記念写真

1968年7月には7人のうちの3人で北海道旅行に行った。当時カニ族と称されていたカニのようにリュックを担いでユースホテルを利用する安旅で、25日間有効の均一周遊券は11,150円、学生には最適の旅であった。二十歳の若さで北海道を一周し、利尻富士でご来光をみた光景は今でも忘れられない。

このような楽しい教養部生活は2年目の冬より急変する。大学紛争が激化し教養部が封鎖されたのである。1968年12月教養部を含む多くの学部が封鎖され、卒業式、入学式が中止となった。この紛争は教養部が中心となっており1969年8月8日に封鎖が解除されるまで長期にわたり授業はなく、バイト、マージャンに明け暮れ、我々7人の会う機会も少なくなった。この間当然試験はなく、会うのはレポート提出のため集まってレポートを作成する程度であった。

専門課程にすすむと、講座が異なり7人がどのように付き合っていたのか思い出せない。卒業式の後、7人で三宮に繰り出しそこで別れたのが大学時代の最後である。

3. 会社時代

1970年に大阪万博が終り、翌年の1971年に7人のうちの5人が社会人となり、2人が大学院に進んだ。この2人の卒業は1973年であるが、一人を除き6人が関西の企業に就職した。卒業後全員が就職すると、会うことは少なくなったが、それでも結婚式には出席し、年賀状のやりとりは続いた。

入社して2年が過ぎようとする1973年3月15日、一人の友が亡くなったと訃報が入る。「七甲山、六甲山となりにけり」【甲之乙丙】、7人の友が6人になってしまった、当時川柳をやっていた私の悲しみの句で、甲之乙丙は柳号です。更に、いつ頃であったか思い出せないが、おそらく40年以上前に一人の友からの年賀状が届かなくなった。既に実家はなく、就職先でも情報なく、音信不通が続き現在も行方不明である。こうして生涯の友は私を含め5人になってしまった。

各人が結婚して子供ができ、家庭が生活の基盤となるにつれ、学生時代のようにみんなと会う時間がとれなくなった。そのうち、仕事が忙しくなり転勤などにより簡単に会えなくなった。1980年代は各企業で海外進出が活発になった時代で、輸出比率30%目標が経営方針で、私は海外要員となり定年まで海外の仕事をすることになる。他の友は、中東に行ったり、米国に駐在したり、一人は中国工場の総経理（注：社長のこと）で定年を迎えた。

この頃の友との思い出は少なく、この会社時代は我々5人にとり停滞期であったが、幸運であったのは、その時の海外での経験が定年後に役にたったことである。

4. 定年後の生活

団塊の世代が定年を迎えた社会現象を2007年問題と云われたが、我々5人も現在、定年後の生活を送っている。一人が自身のブログに「異なる定年後の過ごし方」を載せた、本人の承諾を得たのでここに紹介する。

以下は、当該ブログからの引用である。

昨夜、大学時代の友人との食事会があった。だいたい3か月に一度程度行っているが、会社時代の友人と違って何の遠慮も配慮も要らずに語り合える仲間たちだ。

我々が卒業した71年（大学院卒は73年）は高度成長真っ盛りの時代で、今とは違い完

全な売り手市場であった。さすがバブル時代のようにはいかなかったが、就職先は大手企業を中心に、より取り見取りで好きなところが選べた。我々5人全員関西の名だたる大手企業に就職、研究、設計、製造、技術など、それぞれ異なる仕事に就いた。就職後はたまに会う程度であったが、全員が家庭を持ち同時に責任ある立場につくにつれて会う頻度は少なくなっていた。

それが劇的に変わったのは、2年前の定年後である。私が中国から帰ってきたこともあって、それ以後は頻繁に会うようになり馬鹿話をしている。では5人の定年後の生活を紹介する。

私はこのブログのタイトルにあるように、2年前の定年を機に中国でコンサルタント会社を経営している。3週間は中国、10日は日本と毎月日中間を往復する生活を送っている。

次は、10年近く前に大手鉄鋼会社を早期退職して日本企業と海外政府と傘下の機関との橋渡しをするコンサルタントとして起業し今に至っている。今は年老いた両親の世話もあり半休状態だ。

次の友人は、数年前に大手産業機械会社を早期退職した後、大手コンサルタント会社と個人契約を結び、マレーシアでのポンプ場建設の指導を行っており、日本と往復しながらだいたい半年は海外にいる。

次は、大手重工業会社を定年後、子会社の役員に就任し、恵まれた会社人生を未だ続けている。彼と会うたびに、全然仕事をしないのに給与だけ入ってくる気楽な身分だと冷やかしている。

そして最後は、大手電機会社での研究一筋の人生を終えた後は、一切仕事をせず地方にある農家を購入して農業をしている。彼の話によれば、農業は工場の生産活動のようにPDCAの世界で頭を使うらしい。

彼らと知り合って44年経つが、話すときの気持ちはまるでタイムスリップしたように20歳前後の青年のような気分だ。あれから半世紀近くが経ったなんてまるで信じられない。昨日は、血の滴る肉を全部平らげながら、ビールに、シャンパン、ワインの杯を重ね、お喋りしているうちにあっという間の3時間が過ぎてしまった。今度は5月に合おうと約束して別れた。

このブログは2011年3月のもので多少古いが、5人の飲み会は現在も年に4~5回の頻度で継続中である。

5. あとがき

神戸大学で生涯の友が初期形成され、会社時代の停滞期を経て、定年後の現在最盛期である。全員健康であるが、これは年に4~5回大学時代にタイムスリップすることにより老化を防いでいるのであろう。このような友を得ることになった神戸大学に感謝の念を新たにし、筆をおく。

(終)

寄稿日：平成27年（2015年）6月11日 座03-02